

## 《ヨハン・ルードルフ・チェルニーン伯爵のためのコントルダンス》K.269bの成立背景 モーツァルト時代におけるザルツブルク市民の舞踏行事

野口秀夫

### 1. はじめに

ヴァイオリン協奏曲 二長調 K.218 第3楽章の民謡風メロディはミヒャエル・ハイドンの筆跡になるクラヴィーア譜《ヨハン・ルードルフ・チェルニーン伯爵のためのコントルダンス》K.269bから引用されていることが明らかであるが<sup>注1</sup>、このコントルダンスのオーケストラ版オリジナルはどういった機会のためにいつ誰が作曲したものであろうか。それを考察するに当たり、ザルツブルクにおける舞踏会行事の実践形態を紐解いて行こう。

### 2. ザルツブルク市民の舞踏会

ザルツァッハ右岸のハンニバル広場(現マカルト広場)に面した一角にかつての大司教パーリス・ロードゥローン(在位:1619年-53年)が建てた舞踏会場があった<sup>注2</sup>。宮廷の公的舞踏会や貴族の私的舞踏会そして謝肉祭の仮装舞踏会などに使われたものと考えられるが、詳細は不明である。

さらに、広場の南側には、1610年代に建造され1711年にアンナ・エーファ・ヴェーグルホーファーなる女性が所有者となり、その夫で宮廷舞踏師のローレンツ・シュベックナーが貴族たちに舞踏を教えたため<タンツマイスターハウス>という綽名がついた建物がある。彼はこの建物で貴族たちが舞踏会を催す許可を得たという。1730年頃には大広間<タンツマイスターザール>がしつらえられ、時の大司教レーオポルト・アントーン・エレウテリウス・フォン・フィルミアン(在位:1727年-44年)はここで仮装舞踏会を催す許可を与えている。そして1739年にローレンツの息子で大司教宮廷舞踏教師で近侍でもあったフランツ・カール・ゴットリーブ・シュベックナーがこの建物を所有することになり、仮装舞踏会を催したとされている。しかし、シュベックナーの死後この建物の所有者となった従妹のマリーア・アンナ・ラープはここで舞踏会を催すことはなかった。広い大広間を結婚式の会場などに提供したという。その<タンツマイスターハウス>にモーツァルト一家が引っ越して来たのは1773年の10月ないし11月のことであった。モーツァルト一家はこの建物でコンサート、射的会やピアノの試し弾き、楽器の展示などを行ったという<sup>注3</sup>。舞踏会については1774年10月28日に練習でこの建物を使用していることがザルツブルクの宮廷顧問官ヨアヒム・フェルディナント・フォン・シーデンホーフエンの日誌により分かるが<sup>注4</sup>、それ以外の記録はない。パリザーニ邸のように頻繁に開催されていなかったのであろうか<sup>注5</sup>。

では、舞踏会を開く許可を得る条件とは何だったのだろうか。それには当時の法令がヒントを与えてくれる。1736年には大司教フィルミアンがマナー令を発令しており、1756年には大司教ジークムント・シュラッテンバッハ(在位:1753-71年)により拡張され、新たに「舞踏やそれに類した行事によって犯される無作法な行為」が発生しないように干渉するものであった<sup>注6</sup>。この法令は私的な舞踏会を念頭に置いているに違いない。さらに大司教ヒェロニムス・コロレード(在位:1772-1803)は就任後すぐの1772年と1773年に新しい規則を発令し、主催者と醸造家は舞踏会の実施を1~2日前に維持法廷(Pfleggericht)に報告する義務を課し、非課税対象となるダンス、いわゆる「フリーダンス」を禁止した<sup>注6</sup>。この法令は舞踏行事(踊りと飲酒という遊興)からの税収を漏れなく掬い上げようという合理主義者らしい対応策であり、むしろ舞踏行事を奨励するものであった。従って一般市民でも申し上がった中間階級は税金・参加費さえ払えば、主催・参加するチャンスが与えられていた。

大司教コロレードの意図はさらにはっきりと実行に移される。前記の古い舞踏会場を改築し1775年11月16日に宮廷劇場(Fürsterzbischöfliche Hoftheater)として公開することにしたのである<sup>注2</sup>。その目的は劇場に来る社会的階層を貴族だけではなく一般市民にまで広げることであった。同じ目的でコロレードは市庁舎に新しく舞踏会場(Tanz Saal)を開いた。ローレンツ・ヒューブナーの報告によれば、市庁舎内の「2階[日本式3階]には1775年に大司教ヒェロニムス・コロレード閣下のご下賜と市の財務負担により仮装舞踏会場(Redoutensaal)が現在[=1792年]ある姿で準備された。そこにはオーケストラスペースと多くのランプとシャンデリアが備えられており、その上部にはレース模様の懸華装飾が施され、非常に楽しげで洒落た効果を出している。そしていくつかの小さな部屋とサイドルームがあり、客人のさまざまな用途に応じられるように心地よく調度が施されている<sup>注6</sup>」という。シーデンホーフエンの1775年1月18日の日誌で「今日は市庁舎で[今年]最初の舞踏会(Ball)である。94人が来た<sup>注4</sup>」と書いているので既に謝肉祭期間に利用可能であったことが分かる。しかし一般市民の参加に関しては後に問題も発生したようである。「高位の貴族たちはこの改革に反対した。市庁舎の舞踏会に多くの貴族の召使たちが来るようになったため、貴族たちは避けるようにして自分たちの舞踏会を新規の建物[宮廷]内で開催した<sup>注6</sup>」という報告がある。大司教コロレードは仮装舞踏会場から毎年得られる利益500フローリンを一般劇場基金に積み立てるようにした<sup>注6</sup>。従って参

加料は高価だったのである。モーツァルトが市庁舎の仮装舞踏会に参加したのは1776年の謝肉祭に父子で1回の記録があるのみである。その翌日の舞踏会では“モーツァルトの小オペラ”とレーオポルトの“農夫の結婚”が上演されたので招待による参加であろうと思われる<sup>注4</sup>。一方、1776年10月6日にはナンネルが参加しており<sup>注4</sup>、またナンネルは自身の日記帳によれば1783年の謝肉祭シーズンに6日間も市庁舎の仮装舞踏会に通っている<sup>注7</sup>。もっともご婦人は無料であったと考えられる<sup>注8</sup>。

表1にシーデンホーフエンの参加した舞踏会の一覧を示す（RはRedoute、BはBall、MはMassque）。更に表2にはその舞踏会のカレンダーを示す（ここで練習、結婚式は除外した。ハッチング部分は謝肉祭期間、太字は舞踏会開催日を示す）。もちろんこれ以外にシーデンホーフエンが参加しなかった舞踏会があり、記録から漏れていることは言うまでもない。特にモーツァルトの参加への言及は思いのほか少ない。モーツァルトが個人邸での舞踏会を好んでいたのに対し<sup>注5</sup>、シーデンホーフエンは市役所の舞踏会に好んで参加していき違いになっているのかも知れない。じっさい、シーデンホーフエンが自宅で舞踏会を開催した記録は見当たらない。

なお、舞踏会はほとんどの場合明け方まで続けられている。蛇足ながら後にモーツァルトがウィーンの自宅で開催した舞踏会をレーオポルトに報告している手紙で「晩の6時に始まって、7時まで続きました。えっ、たったの1時間かって？ いえ、ちがいます。翌朝の7時までですよ<sup>注9</sup>」と言っているのはザルツブルクの慣習を知っている二人にしては白々しく奇妙である。もっともシーデンホーフエンの日誌には5時半以降の午前様はないから「翌朝の7時」は破格ということか。また、ウィーンからの同じ手紙で「どうしてぼくのところにそんな空間があるか、不思議に思うでしょう？ そう、それで思い出しました。ぼくはこの1か月前から新しい下宿に住んでいるのを、お伝えするのをずっと忘れていました。[...]ぼくらの住居の隣にあと二つ、立派で大きな部屋があり、これがまだ空いているので、今回のぼくらの家庭舞踏会に活用したわけです<sup>注9</sup>」と述べていることから、モーツァルトがウィーンで家庭舞踏会を開催できたのは極めてまれなケースであったということが伺える。

表1-1 シーデンホーフエンの参加した舞踏会一覧（前半）

日時	曜	場所	舞踏会	人数	コトルダンス	ガドリユ	ドイツ舞曲	メヌエット	開始	終了	備考
1774/10/25	火	ハリザニ邸	B		マテロー/ラ・マノ/ラ・フィル					1:30	
1774/10/28	金	モーツァルト邸	練習		単数					18:00	モーツァルト参加
1775/1/18	水	市庁舎	B初日	94							
1775/1/22	日	市庁舎	B	120	ベル・フィル/マテロー				20:00	2:00	
1775/1/25	水	市庁舎?	B	64							
1775/1/26	木	ハリザニ邸	練習		単数						
1775/1/28	土	ハリザニ邸			複数						
1775/1/29	日	市庁舎?	B	216	新曲1	2				4:00	コレート臨席
1775/2/5	日	市庁舎?	B	190	1	新曲1			21:00	4:00	
1775/2/8	水	市庁舎?	B	56	新曲1	新曲1					
1775/2/11	土	ハリザニ邸			複数						
1775/2/12	日	市庁舎?	B	270							
1775/2/14	火	エルンスト伯爵夫人邸	初日	M24	大コトルダンス						
1775/2/15	水	市庁舎?	B	60							
1775/2/19	日	市庁舎	R	M440							
1775/2/20	月	市庁舎?	練習		単複不明						コレート臨席
1775/2/22	水	ロードウローン邸	練習		単複不明						
1775/2/22	水	市庁舎?	B	70	単複不明					3:00	
1775/2/23	木	市庁舎	練習		単複不明						
1775/2/25	土	市庁舎	練習	M	単複不明						
1775/2/26	日	市庁舎?	B	265	2	2				4:00	
1775/2/27	月	市庁舎?	R	M470							
1775/2/28	火	市庁舎?	練習終	M24+	大コトルダンス (30のフィギュア)				11:00		フェルニオン参加
1775/2/28	火	市庁舎?	R	M24+	大コトルダンス (30のフィギュア)				18:00	0:00	コレート臨席 フェルニオン参加
1775/5/16	火	個人邸?	結婚式	34?						1:00	
1775/7/17	月	個人邸?	お祝い			1		ドイツ風 単数		3:30	
1775/10/2	月	市庁舎?	R	M230	単複不明					2:30	シーデンホーフエンが踊ったのは1曲のみ
1776/1/14	日	市庁舎	B初日	34							
1776/1/17	水	市庁舎?	R	M87						2:00	
1776/1/21	日	ミュンヘン仮装舞踏会館	R	M	複数			ドイツ風 複数			
1776/1/21	日	ミュンヘンアルベルト邸			複数					2:00	
1776/1/23	火	ミュンヘンラッツウィル侯爵邸	B		複数					2:00	
1776/1/24	水	ミュンヘン仮装舞踏会館	R		3						
1776/1/28	日	ミュンヘン仮装舞踏会館	R	50?							
1776/1/30	火	ミュンヘンアルベルト邸			複数					2:00	
1776/2/4	日	市庁舎?	R	M190	新曲2、旧曲1					4:00	コレート臨席
1776/2/7	水	市庁舎?	R	M220	複数					4:00	
1776/2/11	日	ハリザニ邸	練習	44	5つのミュンヘンもの					19:00	モーツァルト参加
1776/2/11	日	ハリザニ邸		44	4つのミュンヘンもの	2	4回			4:00	モーツァルト参加
1776/2/14	水	市庁舎?	R	M410							フェルニオン参加
1776/2/18	日	市庁舎?	R	M420	複数					4:00	モーツァルト参加 フェルニオン参加
1776/2/19	月	市庁舎?	R	M310						5:30	モーツァルトの小オペラ

表1-2 シーデンホーフエンの参加した舞踏会一覧(後半)

日時	曜	場所	舞踏会	人数	コントロールダンス	か'リユ	ドイツ舞曲	メヌエット	開始	終了	備考
1776/9/4	水	ベルヒテスガーデン	小B		単数		単数	単数		1:00	泊りがけ旅行
1776/9/26	木	市庁舎?	練習	M24	単数 (24のフィギュア)				16:00	19:00	チェルニン参加
1776/9/27	金	シェーンホルン邸	練習		単数						
1776/9/28	土	市庁舎	練習		単数						
1776/9/30	月	市庁舎	R	M					22:00		
1776/9/30	月	市庁舎?	R	M					4:00		
1776/10/6	日	市庁舎?	R	M332	12	単数			4:30		ナンネル・モーツァルト参加
1776/10/13	日	司教フライヘー伯爵邸	R	M400	10		単複不明		5:00		
1777/1/12	日	市庁舎	R初日	M77					22:00	3:00	
1777/1/19	日	市庁舎?	R/B	117					4:00		
1777/1/26	日	市庁舎?		M208				ドイツ風 単数	4:30		コロレド臨席
1777/1/27	月	小人の城	R	M200							
1777/1/28	火	ザウアーウァイン邸	B								
1777/1/28	火	トリクシュトゥーヘ邸	B								
1777/1/29	水	クインヘルシュテッター邸	B								
1777/2/1	土	リュッツォウ邸	練習		単複不明						
1777/2/2	日	市庁舎?	R	M180						3:00	
1777/2/5	水	市庁舎?	B	M143	3	4				4:00	
1777/2/9	日	市庁舎?	R	M369	4			ドイツ風 単数	21:00	4:00	
1777/2/10	月	市庁舎?	R	M270	3					4:30	
1777/2/11	火	市庁舎?	R	M157	1	6			18:30	23:30	
1777/10/5	日	市庁舎?	R	M500	3			15	21:00	5:00	チェルニン参加
1777/10/13	月	市庁舎	結婚式	80							
1777/11/17	月	個人邸?	結婚式		実に多くの						
1778/1/12	月	フライヘー伯爵邸?	B								
1778/2/4	水	市庁舎?	R初日	36							
1778/2/8	日	市庁舎?	R	70							
1778/2/9	月	フォン・グレンツ氏のホール?	結婚式		沢山の	沢山の					ハイエルの音楽家及び ブルムラハー・マティース
1778/2/15	日	市庁舎?	R	M160						1:30	
1778/2/18	水	市庁舎?	R	M42							
1778/2/22	日	市庁舎?	R	M280							
1778/3/1	日	市庁舎?	R	M236						1:30	
1778/3/2	日	市庁舎?	R	M240						1:30	チェルニンのハントマイム
1778/3/3	火	市庁舎?	R終	M							

表2 シーデンホーフエンの参加した舞踏会カレンダー

1774年				1775年				1775年				1776年			
10月		1月		2月		3月		10月		1月		2月		3月	
日	23	15	<b>22 29</b>	<b>5</b>	<b>12 19</b>	<b>26</b>		日	1	<b>14 21 28</b>	<b>4</b>	<b>11 18</b>			
月	24	16	23 30	6	13 20	<b>27</b>		月	<b>2</b>	15 22 29	5	12	<b>19</b>		
火	<b>25</b>	17	24 31	7	<b>14 21</b>	<b>28</b>		火	3	16 <b>23 30</b>	6	13	<b>20</b>		
水	26	<b>18 25</b>	<b>1</b>	<b>8 15 22</b>	1			水	4	<b>17 24 31</b>	<b>7</b>	<b>14</b>	21		
木	27	19 26	2	9 16 23	2			木	5	18 25	1	8	15	22	
金	28	20 27	3	10 17 24	3			金	6	19 26	2	9	16	23	
土	29	21 <b>28</b>	4	<b>11 18 25</b>	4			土	7	20 27	3	10	17	24	

  

1776年				1777年				1777年				1778年			
9月		10月		1月		2月		10月		1月		2月		3月	
日	29	5	12	<b>12 19 26</b>	<b>2</b>	<b>9</b>		日	<b>5</b>	12	11 18 25	1	<b>8 15 22</b>	<b>1</b>	
月	<b>30</b>	<b>6 13</b>	13 20 27	3	<b>10</b>			月	6	13	<b>12 19 26</b>	2	<b>9 16 23</b>	<b>2</b>	
火	31	7 14	14 21 <b>28</b>	4	<b>11</b>			火	7	14	13 20 27	3	10 17 24	<b>3</b>	
水	1	8 15	<b>15 22 29</b>	<b>5</b>	12			水	8	15	14 21 28	<b>4</b>	<b>11 18 25</b>	4	
木	2	9 16	16 23 30	6	13			木	9	16	15 22 29	5	12 19 26	5	
金	3	10 17	17 24 31	7	14			金	10	17	16 23 30	6	13 20 27	6	
土	4	11 18	18 25	1	8 15			土	11	18	17 24 31	7	14 21 28	7	

また、ウィーンからの別の手紙では「謝肉祭の月曜日に、ぼくらは仮面舞踏会で仲間の仮装劇を披露しました。それはパントマイムで、踊りの中休み半時間をぴったり埋めました。義姉がコロンビーナ、ぼくがアルレッキーノ、義兄がピエロ、お年寄りの舞踏師(メルク)がパンタローネ、画家(グラッシ)が医者を演じました注<sup>10</sup>」とあり、ザルツブルクでのパントマイム、オペレッタや劇なども同様に踊りの中休みに半時間程度のものであったと推定される。

### 3. 謝肉祭の大コントロールダンス

ミュンヘンでの《偽の女庭師》K.196 上演のためモーツァルトがザルツブルクを不在にしていた1775年の謝肉祭最終日2月28日(火)に開催された仮装舞踏会の様子がシーデンホーフエンの日記に書かれている：

「11時に最後のコントロールダンスの練習があった。[...]夕方6時に仮装舞踏会。ヒロニームス・フォン・コロレド閣下は入場の際に不満を述べられた。フォン・グレンプス夫人がフォ

ン・ルイドゥル氏とともに対応した。私は6時前にはシュタットジンディコ氏〔ベネディクト・フォン・レース〕の所に行きそこでコントルダンス・メンバーと待ち合わせた。メンバーは12ペアから成っている。[...] 私たちは6時過ぎにペアごとに舞踏会場に入った。そこにはヒェロニムス・フォン・コロレード閣下と舞台上に筆頭貴族、その柵の下には別の御仁がご視察のため座っておられた。このコントルダンスは15分とはかからない。したがって全てが繰り返された；それは30のフィギュアから成り立っていた。衣装は白と青の水夫の姿であった。12時には全て終了。12時過ぎに私は家路に就いた<sup>注4</sup>。」

シーデンホーフエンはこの日のコントルダンスをフランス語の単数形で書いている。それが15分であるというのであるが、どのような構成であったのだろうか。モーツァルトの曲の所要時間から類推してみよう。モーツァルトの場合はヴィーンで作曲された曲も含め表3に示すとおり1曲の構成単位の所要時間が1分から2分である<sup>注11</sup>ことから、それと同等とすれば15分のコントルダンス一つというのは8曲から12曲で構成されているということが推定される<sup>注12</sup>。

表3 モーツァルトのコントルダンスの所要時間

K.123(73g)	コントルダンス 変ロ長調	約2分
K.101(250a)	4つのコントルダンス	約6分
K.267(271c)	4つのコントルダンス	約7分
K.462(448b)	6つのコントルダンス	約6分
K.534	コントルダンス 二長調 (『雷雨』)	約2分
K.535	コントルダンス ハ長調 (『戦闘』)	約2分
K.587	コントルダンス ハ長調 (『英雄コーブルクの勝利』)	約2分
K.106(588a)	序曲と3つのコントルダンス	約5分
K.603	2つのコントルダンス	約3分
K.607(605a)	コントルダンス 変ホ長調 (『婦人たちの勝利』)	約1分
K.609	5つのコントルダンス	約8分
K.610	コントルダンス 長調 (『意地悪娘たち』)	約2分

次に演奏の順序であるが、まず、曲集を通して演奏したと思われる。だからこそ15分が計測されたのであって、1曲目を何回か繰り返したのち2曲目に移るという順序ではなかったことが分かる。では、30のフィギュアとはどのようなものであったのであろうか。これについての詳細は後述するが、どうやら1曲ずつが複数のフィギュアで構成されていたようなのである。つまり、8曲から12曲で合計30のフィギュアを踊った。しかし、6時間も同じ曲ばかり繰り返し演奏され続けたとは考えられないので、言及されていない他の曲も踊られたのであろう。

さかのぼって2月14日の午後にシーデンホーフエンはエルンスト伯爵の夫人のところに行き、そこで「24人の衣装付き大コントルダンスの初めての練習」に立ち会っていた<sup>注4</sup>。すなわちこれを称して大コントルダンスと言うのであるが、曲の長さ、参加人数だけでは「大」の形容に相応しくないから年に一度の謝肉祭の仮装舞踏会に踊られるコントルダンスを恐らく演出とともに単にそう呼んだだけなのであろう。

#### 4. 秋の舞踏会シーズン

シーデンホーフエンの1776年9月26日(木)の日誌：「午後4時にはコントルダンスのリハーサルに行く。7時まで続いた。[...] 全部で24人の参加者。2組の「神様のペア」[...] そして8組の「森の神様のペア」[...] さらに4人の「森の男」[...]」

コントルダンスは以下のフィギュアを備えている：ロンド (Rondeau)、プロムナード (Bromenade)、アプローチ (Aproche)、グループ (Groupe)、小ロンド (demi Rond)、モリネ (Moliné) 回転 (Moulinet) 小アプローチ (Petite Aproche)、マルタ十字 (Croix de Malte)、中央及びコーナーへのロンド (Ronde au Milieu et aux Cotés)、併行 (Parallele)、練り行き (changement)、愛のノード (Noeud d'amour)、ストラスブール風 (Strasbourgais)、二重ロンド (double Rond)、騎士のロンド [?] (Ron de cheval)、二重パサージュ (double Passage)、3つのロンド (Trois Rondes)、ロンドへのパサージュ (Passage à la Ronde)、戦いのロンド (Ronde de Bataille)、小ロンド集 (demi Rondes)、ご婦人達のフィギュア (figure des Dames)、皆のフィギュア (Figure Generale)、前のグループ (Groupe en front)、ロンドとフィギュア (Ronde et Figure) <sup>注4</sup>。」

ここで踊られているコントルダンス・ロンドーは「大きな円で始まり、次にペアは向かい合いプロムナードに向かって2列を形成し、さらに交互にアプローチへと到達する。2列はグループに分かれ次のフィギュアを導く(また順次変化していく)。ペアがロンドーに戻りフィギュアの列を再び開始するまで続けられる<sup>注4</sup>」と説明されている。つまり冒頭の4つのフィギュアが1曲に当てられている。1775年2月28日に踊られたコントルダンスの30のフィギュアも同様のものではあったと思われる所以である。ストラスブール風 (Strasbourgais) というフィギュアがK.216との関係を暗示することは別途発表した<sup>注13</sup>。

次に、9 月になぜ舞踏会が開催されているのか、という疑問である。ミッテンドルファーは次のように述べている：「シーデンホーフェンは舞踏会（Redouten）への熱心な参加者であった。このような行事は普段は仮装舞踏会（Maskenbälle）に関連しており、謝肉祭時期、そして加えるに秋に開催された。今日でも行なわれている『カトラインダンス（Kathrein Tanz）』がこの秋の舞踏シーズンを納得させる<sup>注6</sup>。しかし、カトラインダンスは 11 月 25 日になる前の土曜日に民衆文化の一環としての伝統的なダンスシーズンの終わりを形成する「踊り納め」の舞踏であって<sup>注14</sup>、9 月及び 10 月に集中し 11 月には踊られていない秋の舞踏シーズンを『カトラインダンス』と言うのはためられる。

### 5. 舞踏会用舞曲の作曲家・演奏家・舞踏教師たち

シーデンホーフェンの日誌で舞曲の作曲家を示唆する表現には「ミュンヒェンもの」と書かれたコントルダンスがあり、モーツァルトが参加している日でありながら作曲者がモーツァルトではないことがわかる貴重な例となっている<sup>注4</sup>。さらに、シーデンホーフェンの結婚式に演奏されたコントルダンスやカドリューコ<sup>注15</sup>がバイエルンの音楽家及びブルムラハー・マティースという人物のものであることが分かる<sup>注4</sup>（作曲者でなく、演奏者を指しているのかもしれない）。



ヨハン・バプティスト・ヨーゼフ・ヨアヒム・フェルディナント・フォン・シーデンホーフェン（すべて画家不詳）

マリア・アンナ・クララ・フォン・シーデンホーフェン、旧姓ダウブラヴァ・ダウブラヴァイク（画家不詳）

シーデンホーフェンはオペラやミサ曲、ディヴェルティメントなどではモーツァルトや M・ハイドンの名前を明記しているので、モーツァルトの舞曲は使われなかったものと考えられる。

宮廷副楽長の L・モーツァルト<sup>注16</sup>、宮廷楽師長の M・ハイドン<sup>注17</sup>そして W・A・モーツァルト<sup>注18</sup>がザルツブルクで作曲したオーケストラのための舞曲を表 4 に示す。これから分かるのは：

- ・ 市民のための舞踏会はコントルダンスを主としているが、モーツァルトにはその数が少なくモーツァルト以外は作曲していない。すなわち市民のための舞踏会用舞曲には別の作曲者がいたものと思われる。これはウィーンでは宮廷作曲家がコントルダンスやドイツ舞曲を作曲していたのと大きく異なる点である。
- ・ 3 人ともメヌエットは作曲している。おそらく宮廷舞踏会用あるいは結婚式などの個人的祝賀行事のためのものであろう<sup>注19</sup>。

しかし、ザルツブルクで踊られたコントルダンスの作曲者がザルツブルクのアマチュア作曲家であるということをも文字通り受け入れるわけにはいかない。何故ならばその場合でも作曲者の名前はシーデンホーフェンによって明記されるであろうからである。

ミッテンドルファーは「舞曲伴奏のためにもっともしばしば使われた楽器は 2 つのヴァイオリンとバスであった。時には Basso の表記がバスヴァイオリン（Violone）を意味していた。管楽器は多くの場合頻りに組み合わせを変化させ舞曲の伴奏を拡大した。特別な効果を出すために通常の楽器に加え更に多くの楽器、例えばポストホルンあるいは“ベルヒトルスガーデン”楽器が使われた<sup>注20</sup>」と述べている。しかし舞踏会用の楽譜を見ているにもかかわらず、奇妙なことに作曲者についての言及は一切ない。しかし彼女は、「18 世紀のコントルダンスの本には多くの全く異なるコントルダンスが記述されている。舞曲のメロディの引用に留まらず文章によるデータがフィギュアの実践のために付けられている<sup>注20</sup>」と述べ、出版物に記載されている舞曲のメロディ<sup>注21</sup>の利用を認めている。その場合はアマチュア作曲家でもオーケストラ演奏用楽譜を簡単に仕上げることが出来たであろう。一方そのような出版物に基づかない新作が「ミュンヒェンもの」などと称されたのではないだろうか。すなわち、ミュンヒェンものの対極はザルツブルクものではなくて出版物に基づくフランスものやイギリスものであったのではないか。もちろんザルツブルクの無名作曲家によるオリジナル舞曲の存在をまったく否定するわけではないが。

舞踏教師に関して「主な仕事はメヌエットやコントルダンスの練習にあわせて振り付けすることであったが、普及した出版物の中に多数の振り付けが見られ、これらの図解に基づき才能のある素人が練習することができた<sup>注20</sup>」ということなので、舞踏教師は練習の場に必須な存在ではなかった。

表4 宮廷副楽長のL・モーツァルト、宮廷楽師長のM・ハイドンとW・A・モーツァルトがザルツブルクで作曲したオーケストラのための舞曲

L・モーツァルトが作曲した舞曲	メヌエット	フランチェスコ・シュパングレー氏の結婚式のための12のメヌエット(第9曲、第10曲はナンネルの楽譜帳第17曲のメヌエットとトリオと同一) メヌエット K.64(伝W・A・モーツァルト)
W・A・モーツァルトが作曲した舞曲	メヌエット	K.65a(61b) トリオ付き7つのメヌエット [69.1.26、ザルツブルク]
		K.94(73h) メヌエット 二長調 [P:69、ザルツブルク](用紙Skb1772aを含む)
		K.61h 6つのメヌエット [71/72、ザルツブルク]
		K.164(130a) 6つのメヌエット [72.6、ザルツブルク]
		K.103(61d) [ver.1] トリオ付きまたはトリオなしの20(19)メヌエット [P:72初夏/夏、ザルツブルク] (N:71/72、Z:72初夏)
		Skb1772 α_a→K.103(61d)[ver.2] メヌエットNr.12のトリオ第2稿 [P:72初夏/夏]
コントルダンス	メヌエット	K.176 16のメヌエット[73.12、ザルツブルク]
		Skb1773b,c=K.626b/44 コントルダンスのためのスケッチ(《水夫"le matlot"》)
		K.101(250a) 4つのコントルダンス (Z:76初?、ザルツブルク)
M・ハイドンが作曲した舞曲	メヌエット	K.267(271c) 4つのコントルダンス [77初、ザルツブルク] (T:76/77)
		K.610 コントルダンス 長調(《意地悪娘たち"Les Filles malicieuses"》) [T:83夏、ザルツブルク] (『全自作目録』では91.3.6、Z:82-84?)
		MH135 12 Menuetti c 1768-1770 Salzburg
		MH136 12 Menuetti c 1768-1770 Salzburg
		MH137 6 Menuetti c 1768-1770 Salzburg
		MH193 12 Menuetti c 1774 Salzburg?
		MH197 12 Menuetti 1774 Salzburg
		MH210 6 Menuetti c 1773-1775 Salzburg?
		MH250 12 Menuetti 1777 Salzburg?
		MH274 12 Menuetti 1778 Salzburg?
		MH333 6 Menuetti 1783 Salzburg
		MH354 6 Menuetti 1784 Salzburg
		MH413 6 Menuetti 1786 Salzburg
		MH414 6 Menuetti 1786 Salzburg
		MH416 Menuetti Tedeschi 1786 Series I Salzburg
		MH417 Menuetti Tedeschi 1786 Series II Salzburg
		MH423 6 Menuetti 1786 Salzburg
		MH424 Menuetti Tedeschi 1786 Series III Salzburg
		MH499 6 Menuetti 1789 Salzburg
		MH500 Coda 1789 Menuetti Tedeschi. Series II Salzburg
MH550 12 Menuetti 1794 Salzburg		
MH570 6 Tedeschi 1795 Salzburg?		
MH693 12 Menuetti 1798 Salzburg		

公の舞踏会場には専属のオーケストラがいたことはオーケストラスペースがあったことからほぼ確実であるが、ミッテンドルファーによれば「住民の家での舞踏会に人気が増すにつれクラヴィア版もまた重要な意味を持ってきた。というのは明らかに舞踏の手ほどきや楽器レッスンの手ほどきのために使われた<sup>注20</sup>」からという。その用途を裏付けるように「伝えられた舞曲の約25%が2手のためのクラヴィアのための編曲であり、ドイツ舞曲及びコントルダンスに多くのクラヴィア版がオーケストラ版とともに存在する。しかしメヌエットのクラヴィア版は稀である<sup>注20</sup>」という。すなわち個人邸ではドイツ舞曲やコントルダンスの練習だけでなく舞踏会そのものにもクラヴィアが使われたということを示唆しているが、当然楽師が雇われたこともあったであろう。ただ、いずれにしても、モーツァルト自身がヴァイオリンを演奏したりクラヴィアを演奏することはなかったのではなかろうか。

以上の作曲家や演奏家に関する見方に疑問を挟む記述が海老澤敏著『モーツァルトのザルツブルク』にある。「<タンツマイスターハウス>の前任人の「大司教宮廷舞踏教師で近侍でもあったフランツ・カール・ゴットリーブ・シュペックナー[...]はL・モーツァルトと親しく交際しており、レーオポルトがマリーア・アンナと結婚した時、立会人をつとめたほどであった。また、シュペックナーが催す仮装舞踏会にはヴァイオリンを弾いて協力したばかりか、こうした舞踏会用の舞曲を作曲もしている<sup>注3</sup>」。おそらく例外的適用であろうが、この記述を裏付ける原典はトレースできなかつたため詳細は不明である。もしかしたら民間の仮装舞踏会ではなく、宮廷主催の仮装舞踏会が開催されたときの話であって、その場合には宮廷作曲家・宮廷副楽長・宮廷舞踏教師が携わったということなのであろうか。

## 6. モーツァルトのコントルダンスの用途

モーツァルトが舞曲としてのコントルダンスを初めて作曲したのは1770年4月ローマであった。14日付けのレーオポルトからザルツブルクの妻あての手紙に書かれている：「ヴォルフガングも同様に元気で、同封でコントルダンスを1曲送ります。あの子はツェリル・ホフマンさんがこの曲のステップをつけてほしいと望んでいます。また、あの人なら、二人のヴァイオリン奏者がリードをとって弾くときは、二人だけで先に踊り、それからはずっと楽員全体が全部の楽器で入ってくるたびに、踊り手全員がいっしょに踊るようにふりつけできるでしょう。いちばんす

てきなのは五組で踊ることでしょう。第1組が最初のソロをはじめ、第2組が二番目のソロを、というようにやっていくのです。ソロが5つと、トゥッティが5つあるのだから<sup>注22</sup>。」この曲はコントルダンス 変口長調 K.123(73g)と考えられており、1767年5月18日から年100フロリンでザルツブルクの宮廷舞踏教師兼宮廷官吏をつとめていたツェリル・ホフマンに振り付けを依頼している<sup>注4</sup>。シーデンホーフェンの1774年12月29日付け日誌の「午後ブルーダーハウスから舞踏教師が来て、我々を楽しませてくれた」というのが注によればホフマンのことを指しているというので、これらからコントルダンスの振り付けに宮廷舞踏教師が関わっていたのが例外ではないと言えるであろう。しかし、K.123が依頼どおりに振付けられたのか、実際に踊られたのかは不明である。

1773年のスケッチに見られるマテロー(Mat[e]lot)<sup>注23</sup>はコントルダンスの一種で大多数がアングレーゼ<sup>注24</sup>であるという。4人だけのグループで、立っているペアが一行になつて順次踊られるものである<sup>注4</sup>。未完成のまま習作で終わったものと思われる。シーデンホーフェンの日誌には1774年の秋の舞踏期間と1775年の謝肉祭期間にマテローが踊られた記録がある<sup>注4</sup>。マテローとは水夫のことであり、水夫衣装は仮装の定番でもあった。

4つのコントルダンス K.101(250a)は1776年の謝肉祭用、4つのコントルダンス K.267(271c)は1777年の謝肉祭用にモーツァルトが作曲したと言われているが<sup>注25</sup>、シーデンホーフェンの日誌にモーツァルトの名前がないことからモーツァルト作曲の大コントルダンスとして使われたとは考えられない。この2曲は習作の色も濃いが<sup>注1</sup> 実的にはおそらくモーツァルト邸での舞踏会、それも秋の舞踏会用に作曲されたものではないかと思われる(この場合モーツァルト家の<タンツマイスターハウス>ではオーケストラで舞踏会を開催できたと仮定する)。

コントルダンス ト長調(「意地悪娘たち"Les Filles malicieuses"」) K.610はK.609の第5番と同一(ただしK.609にはホルンが無い)であり、K.609は『全自作品目録』で1791年3月6日作曲となっているものの、原曲のK.610の方は1784年2月に開始された『全自作品目録』に記載されていないことからそれ以前の作曲、タイスンによれば1783年の夏に作曲されたとされている<sup>注26</sup>。ということはモーツァルトがコンスタンツェとともにザルツブルクに里帰りした年の秋の舞踏会用に<タンツマイスターハウス>或いは他の個人邸で踊られたものではないか<sup>注27</sup>。なお新全集序文では「意地悪娘たち」というタイトルはオペラかバレエのタイトルから来ているのであろうとしたが<sup>注28</sup>、校訂報告ではそうではなくて舞踏会のときに参加した娘たちに因んでいるのではないかとしている(筆跡は「モーツァルトか?」となっている)<sup>注29</sup>。K.216、K.218で舞曲の引用がミュゼットを伴っていたが、このK.610は舞曲そのものがミュゼットを伴っている<sup>注30</sup>。

## 7. ヨハン・ルードルフ・チェルニーン伯爵のためのコントルダンス K.269bの原曲

ヴァイオリン協奏曲 二長調 K.218が作曲されたのは1775年10月のことであった。モーツァルトが引用した舞曲は従ってモーツァルトが不在であった1775年の謝肉祭に踊られた曲である可能性が最も高い。対案としてモーツァルトが帰郷したあとの秋の舞踏シーズンに踊られた曲ということもありうるが、オーケストラ版からクラヴィア版への編曲とヴァイオリン協奏曲への引用が約1ヶ月間に行われたというのは手回しが良すぎると思われる。

この年オープンしたばかりの市庁舎の舞踏会は、謝肉祭最終日にコロレド大司教が臨席した記念すべき行事であったのだ。曲はフランス或いはイギリスのコントルダンス集の出版物から抜粋したものをザルツブルクの作曲家がオーケストレーションして大コントルダンスとしたものであろう。ほぼ1週間後に帰郷したモーツァルト父子はM・ハイドンからクラヴィアに編曲された大コントルダンスの曲集を貰い受け、つぶさに報告を受けたのではないが、12曲で30のフィギュアから成るコントルダンスということになる<sup>注31</sup>。可能性としてはそこにストラップ風風のフィギュアも含まれていたかも知れない。この大コントルダンスに参加していたチェルニーンと親しくなったモーツァルトは、自らの曲(K.101及びK.218そしてK.267及びK.216にも?)にいくつかの引用をし、おそらくコピーを手元に置いて曲集をチェルニーンに手放したのではないが、チェルニーンは曲がモーツァルトのものではないことを当然知っていたが、モーツァルトから貰ったという伝承が誤って「モーツァルトによって書かれた(Von Mozart geschrieben)」とされてしまったのであろう<sup>注1</sup>。曲そのものが可もなく不可もない出来であるので、後世の研究者ですら作曲家の特定に掴み所がなく戸惑った程だったからであったのだ。

## 8. まとめ

ザルツブルクでの音楽家生活にやがて見切りをつけるモーツァルトではあったが、当時モーツァルトの周りでもどのように市民の舞踏活動が実践されていたかを整理してみた。しかし、ザルツブルク時代はデータが不十分であり、ヨハン・ルードルフ・チェルニーン伯爵のためのコントルダンス K.269bの成立経緯に関してはほとんどが推定の域を出ない。次回はチェルニーン伯爵その人との関係から調査を継続することとしたい。

注：

- 注 1：神戸モーツァルト研究会第 215 回例会参照 (<http://www.hi-net.zaq.ne.jp/buasq502/215.pdf>)
- 注 2：海老沢敏、R・アンガー・ミュラー 文 / 稻生永 写真『モーツァルトの旅 ギルツブルク』音楽之友社 (1991 年) 89 ページ。西川尚生『作曲家 人と作品シリーズ』モーツァルト』音楽之友社 (2005 年) 87 ページ。  
Wikipedia: Salzburger Landestheater ([http://www.salzburger.com/wiki/index.php/Salzburger\\_Landestheater](http://www.salzburger.com/wiki/index.php/Salzburger_Landestheater))  
Salzburger Landestheater ([http://www.salzburger-landestheater.at/index.php?option=com\\_content&view=article&id=83&Itemid=27](http://www.salzburger-landestheater.at/index.php?option=com_content&view=article&id=83&Itemid=27))
- 注 3：海老沢敏著：『新 私のモーツァルト・クロニクル モーツァルトのギルツブルク』、音楽之友社 (1996 年) 76-78 ページ。
- 注 4：Joachim Ferdinand von Schidenhofen Ein Freund der Mozarts, Die Tagebücher des Salzburg Hofrats (Herausgegeben und kommentiert von Hannelore und Rudolph Angermüller unter Mitarbeit von Günther G. Bauer), Verlag K. H. Bock, 2006.
- 注 5：1783 年 1 月 22 日付けモーツァルトからギルツブルクのレーオポルト宛の手紙でコンスタンツェとモーツァルトは「個人の家での舞踏会のほうが好きです」と言っているにもかかわらず、である。以下手紙の翻訳は海老沢敏・高橋英郎編訳『モーツァルト書簡全集』、白水社から引用した。
- 注 6：Monika Mittendorfer, Tanzveranstaltungen in Salzburg in der zweiten Hälfte des 18. Jahrhunderts, in: Mozart-Jahrbuch 1987/1988, Kassel usw. 1988, S. 69-71.
- 注 7：Meine Tag Ordnungen: Nannerl Mozarts Tagebuchblätter 1775-1783, mit Eintragungen ihres Bruders Wolfgang und ihres Vaters Leopold, Verlag K.H. Bock, 1998.
- 注 8：注 5 の手紙にはウィーンの自宅で家庭舞踏会を開催した際、「紳士たちはそれぞれ 2 グルデンずつ払いました」とある。約 2 万円である。
- 注 9：注 5 の手紙を参照。
- 注 10：1783 年 3 月 12 日付け、ウィーンのモーツァルトからギルツブルクのレーオポルト宛の手紙。
- 注 11：Neal Zaslaw and Fiona Morgan Fein: The Mozart Repertory: A Guide for Musicians, Programmers, and Researchers, Cornell Univ Pr, 1991 のタイミングデータによる。
- 注 12：モーツァルトの自作品目録でのコントルダンスの数え方も曲集で 1 つと数えている。
- 注 13：神戸モーツァルト研究会第 213 回例会参照 (<http://www.hi-net.zaq.ne.jp/buasq502/213.pdf>)、また、1783 年 2 月 12 日付ナンネルの日記帳に「フランス喜劇の 3 回目、1 幕の《ロンドンのフランス人》。その後ロシアのヴァラブレフキーによりエングリッシュ [=アングレーゼ] が踊られた。オペレッタ《牛乳売りの少女》が演じられた。そしてテレーゼ・ラフィ嬢と私：ヴァラブレフキーによってシュトラースブルグッシュが踊られた」とあり、舞踏会ではなく劇の合間にロシアのダンサーによってであるがシュトラースブルク舞曲が踊られている。このようにシュトラースブルク舞曲がギルツブルクに浸透していたことを従来のモーツァルト研究は見落としていた。
- 注 14：Wikipedia: Kathreintanz (<http://de.wikipedia.org/wiki/Kathreintanz>)
- 注 15：カドリーユは正方形あるいは長方形に配置された偶数ペアによるコントルダンスである。18 世紀後半に社交ダンスへと展開してゆき、ワルツやポルカとあわせ 19 世紀には最も人気のある舞曲となった。エリック・スミスは『モーツァルト全作品事典』(音楽之友社)の項で「ニッセンは、2 曲のコントルダンス[K.463(448c)]を指して、この曲の自筆譜に『2 つのカドリーユ』と書き記した。しかし、カドリーユがコントルダンスの方法で踊られるようになったのは、19 世紀になってからのことなので、ニッセンの記載は時代を混同したものと いわざるを得ない。(p.277)」と述べているが、シーデンホーフンの日記に頻繁に出てくることから「時代を混同」としているという指摘は当たらないと思われる。
- 注 16：Stanley Sadie: The New Grove Dictionary of Music and Musicians, Macmillan Publishers, London, 1980.
- 注 17：Charles H. Sherman, T. Donley Thomas: Johann Michael Haydn (1737 – 1806), a chronological thematic catalogue of his works, Pendragon Press, 1993.
- 注 18：モーツァルト全作品・草稿・スケッチ年代順目録 (<http://www.asahi-net.or.jp/~rb5h-ngc/koechel.htm>)
- 注 19：モーツァルトはマンハイムから父宛に 1778 年 2 月 7 日付けで「[シーデンホーフンが結婚することを] 知らせてくれていれば新しいメヌエットを彼の結婚式のために書いたのに」と述べている。
- 注 20：Monika Mittendorfer.: Quellen der Salzburger Tanzmusik, in: Bericht über den Internationalen Mozart-Kongreß Salzburg 1991, in: Mozart-Jahrbuch 1991, Kassel usw. 1992, S. 403-408.
- 注 21：例えば de La Cuisse: Le répertoire des bals, ou Theorie-pratique des contredanses, décrites d'une maniere aisée avec des figures démonstratives pour les pouvoir danser facilement, auxquelles on a ajouté les airs notés. (<http://memory.loc.gov>)
- 注 22：海老沢敏・高橋英郎編訳『モーツァルト書簡全集』第 II 巻、白水社 (1980 年) 107 ページ。
- 注 23：Emily Iuliano Dolan: A Mozart Manuscript at Cornell University in Mozart Society of America Newsletter, Vol.8, No.1 (<http://mozartsocietyofamerica.org/publications/newsletter/archive/MSA-JAN-04.pdf>) によればケツヒェル 6 版は"le mottet"、ザスローは"le mollet"、コンラートはフェイ・ファーギュスンの助けにより"le matlot"と読み取っている。NMA Serie X Supplement, Werkgruppe 30, Band 3 Skizzen.
- 注 24：注 20 によればアングレーゼは 2 列になって“二重コラム”で踊る。紳士の列と淑女の列がそれぞれ向かい合う。ペアの数は制限無く好きなだけのペアが踊りに加わることができる。それぞれの列にはフィギュアのシーケンスや続き具合を決定する真の“踊り手”があり、またペアのフィギュアをなぞって実践を助けた“フィギュラント”がいた。舞踏の過程でペアは繰り返し相手の後ろに位置を交代し前方にそれぞれ進む。そしてペア 1 の踊りに属する全てのフィギュアのシーケンスは“抜け出す”位置に至る。次にペア 1 と同じシーケンスをペア 2 が繰り返す。
- 注 25：NMA IV/13/Abt. 1/1: Tänze · Band 1, Edition (Elvers, 1961).
- 注 26：Alan Tyson: Mozart: Studies of the Autograph Scores, Harvard University Press 1990, p.33.
- 注 27：ナンネルの日記帳 (注 7 参照) によれば 1783 年 10 月 18 日にモーツァルト邸で舞踏会があり、翌日にはナンネルがアイツェンベルガー館の舞踏会に参加したことが記録されている。モーツァルト夫妻がギルツブルクを去ったのは 10 月 27 日であったから一緒に参加した可能性はある。
- 注 28：NMA IV/13/Abt. 1/2: Tänze · Band 2, Edition (Flothuis, 1988).
- 注 29：NMA IV/13/Abt. 1/2: Tänze · Band 2, Kritischer Bericht (Flothuis, 1995).
- 注 30：Brilliant の CD では出典不明であるがタイトルを《意地悪娘たちあるいはミュゼット吹きたち》"Les Filles malicieuses" ou "Les joueurs de musette"としている。
- 注 31：注 20 によれば「ギルツブルクに伝えられた舞踏曲は普通シリーズものでありセットものであった。作曲家はそれぞれの種類の舞曲を大量に、普通 6 曲か 12 曲のセットで順に番号付けした。社交ダンスとしてこれらセットの個々の曲をピックアップするのがあるいは全シリーズを順番に演奏するのには残念ながら現在伝えられていない」というのがこの場合は 12 曲が順番に演奏されたものと仮定する。

(2010 年 12 月 4 日作成)